



—TAKUMI—



の  
哲学

飛驒産業(株)

生産技術課

宇次原 清明 氏

～受け継がれる

『飛驒の匠』の心と技術～

日本に現存する最古の和歌集、万葉集のなかに「かにかくに 物は思はじ 飛驒人の 打つ墨縄の ただ一道に」という飛驒の大工や木工職人の技術力の高さを示す歌がある。平城京や法隆寺、東大寺などの建設に尽力した飛驒の職人たちはいつしか『飛驒の匠』と呼ばれるようになり、その並はずれた技術力を絶賛されるようになった。

その高度な技術は現代にも受け継がれている。飛驒高山地区を代表する家具メーカーと言えば、飛驒産業㈱（本社：岐阜県高山市漆垣内町3180、社長：岡田賛三氏）を思い浮かべる人も多いだろう。創業から90年を超える歴史のなかで職人たちが磨き上げ、蓄積した技術がそこにある。同社の製品には、「曲げ木」を代表とする数々の技術がふんだんに盛り込まれ、その美しいフォルムは見るものを魅了する。

飛驒産業㈱で生産技術課に所属する宇次原清明氏も『飛驒の匠』の心と技術を受け継ぐ一人。試作品の開発から治具の製作、NC 工作機のプログラム製作まで担当するという宇次原氏にインタビュー取材をお願いした。

—まずは宇次原さんの簡単なプロフィールをお聞かせください。

「年齢は 55 歳になります。高校を卒業して飛驒産業に入社してからは 37 年になりますね。」

—家具製作に携わろうとしたきっかけは何だったのでしょうか？

「男の子ってやっぱり小さいときからプラモデルを作ったりするのが好きじゃないですか？私も物を作るのが大好きだったんです。私が小さい頃、おじいさんが大工をしていて、その血が流れているせいか、おじいさんの作業している記憶が頭のなかに



残っているのか、その影響もあるかもしれません。それで、高山工業高校のインテリア科というところが木工も学べるので入学しました。卒業するときに、やっぱり木工のことをもっとやりたいと思って、高山で一番大きい会社だった飛驒産業で採用していただいた次第です。」

—入社からこれまでどのようなお仕事をされてきたのでしょうか？

「入社当初は椅子を製作する職場に配属されて、機械加工、磨きから組立まですべての作業を勉強させてもらいました。当時は大量生産の時代で、1 日に製作する量もかなりのものでしたね。そこで働くうちに、物作りの原点に立ち帰って、自分の手で最初から最後まで製品を作ってみる仕事がしたいと上司に相談しました。1 年ほどして念願が叶い、生産技術課に配属になってから、これまでずっとこちら

で働いています。」

一生産技術課では試作品作りを担当されたわけですね？

「そうです。図面をもらったらそれを形にしてい  
く仕事ですね。一人で全部やらなければならない大変  
さがありますが、自  
分の手で形が出来て  
いく過程は本当に楽  
しいものです。試作  
品が製品になったと  
ときには、その製品を  
作るための治具と呼  
ばれる道具作りも行  
います。治具が出来たら、そのメンテナンスも担当  
します。NC（数値制御）工作機のプログラムを製  
作することも多いですね。」

—プログラムも覚えられたんですか？

「ええ。基礎的な知識は研修で1週間ほど缶詰にさ  
れて覚えました。20年以上前ですが…（笑）。」

—試作品で思い出に残っているものはありますか

か？

「忘れられないのは生産技術課に来て初めてもら  
った試作の仕事ですね。ベテランなら3日ほどでで  
きるものを1週間かけて作りました。仕事をくれた  
上司の方からどれだけかかってもいいから作って  
みると言われて任されまして。右も左も分からない

まま、先輩にアド  
バイスを受けたり  
はしましたが、実  
際に作るのは自分  
だけ。だから、そ  
れが椅子の形にな  
ったときにはすご  
く感動して…。自

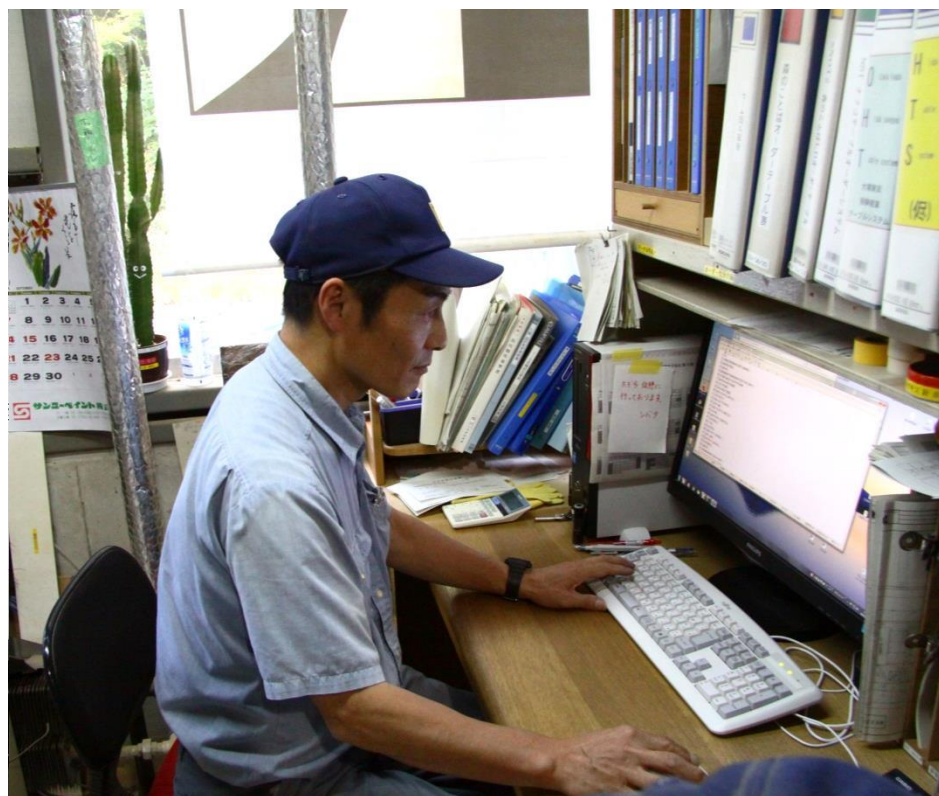
「初めて製作した試作品は3日で  
できるものを1週間かけて作りました。  
それが椅子の形になったときはすご  
く感動して…。自分がやりたかったの  
はこれだったんだと思いましたね。」

分のやりたかったのはこれだったんだと思いま  
したね。その試作品は残念ながら製品化はされません  
でしたが、一番思い出に残っています。」

—試作品作りでとくに努力されたことはどんなこ  
とでしょうか？

「時代背景もあると思いますが、先輩にはよく仕事  
は見て覚えろと言われました。もっと昔は仕事を盗

めとよく言われていたみたい  
ですが。だから、自分の仕事  
をしているときでも、先輩が  
やっている仕事を見て、ああ  
あんなやり方があるんだなと  
思ったら、後で自分なりにト  
ライしてみたり、そういった  
努力はしてきたつもりです。  
あとは自分で作ってみて、自  
信のないところを見てもらっ  
て意見を聞いたりしました。  
それでOKなら自信になりま  
すし、ダメならまた作り直し  
ます。なにをやるにしても、  
繰り返しやるっていうことが  
大切なのかなと思いますね。」  
—試作を作って製品化される  
のはどのくらいの割合です



NC 工作機のプログラムを打ち込む宇次原氏。現代の匠の道具には  
コンピューターも含まれる



奥山清行氏がデザインした KEN OKUYAMA シリーズの『SUGI』

ありますか？

「それはありますね。まずは図面通りに忠実に作るのですが、例えば強度が弱そうな部分はこう変えた方がいいんじゃないかと提案をしますね。ただ、ディテールが少し変わる場合もあるので、最終的な形をデザイン室と話し合って決めていきます。例えば、節のある家具（森のことばシリーズ）では、節をどこに使うと格好いいかとか、ずいぶん悩まされましたね。最近では圧縮した杉の家具を手掛けていますが、一番最初は集成材にした杉で製品を作っていました。杉は柔らかくて、すぐに傷が付くし扱いに困りましたね。圧縮した杉を使って、イタリアのエンツォ・マーリさんがデザインしてくれたものを試作したのも覚えています。奥山清行さんの作品は圧縮していない杉を使っています。すごく軽いですよ。あのフォルムは大好きですね。あのときも試作のときにデザイン室と何度もやり取りを繰り返した記憶があります。」



イタリアのエンツォ・マーリ氏と飛騨産業㈱のコラボ商品『HIDA』

か？

「うちでは試作したものの 90% ぐらいは製品化されていますね」

—ご自分でデザインされることもありますか？

「デザインは発想力がすごく大事ですよ。発想の転換とかイメージ作りとか…。私は図面とかどこかで見てきたものとかイメージが浮かぶものは形にできるんですけど、まったく白紙のところから線を起こしていくというのはちょっと苦手ですね」

—では、デザインされた図面を見て、この図面でこの材料を使用した製品は作れないといったことは

—他の人や他社の製品で印象に残っているものはありますか？

「見た時々で自分の感性に合うとかいい感じだなと感じるものはたくさんあります。メジャーですが、北欧のハンス・ウェグナーさんがデザインした椅子は、奇抜だけどバランスがいい。あれはいいなと思いました。」

—物作りにおいて大切にしていることやポリシーなどありますか？

「あまり難しいこだわりなどは特にありませんが、物を作るときには自分が使う身になってみて、どう

いう仕上げがいいかは常に考えるようにしています。これだったら自分も買うぞと思えるような商品でないとダメですね。

そういう意味では、もし自分が気に入らなかつたら作り直すか、修正できるなら部品を交換するなどします。お客様がこれなら買ってくれる

だろうというクオリティは常に意識して追求しています。」

—実際に使用する方の使い勝手と商品の価値を高める作業ですね。

「そうです。あとは、出来上がった製品のフォルムとバランスはすごく大事だと思います。こっちから見たイメージと逆から見たイメージで左右が歪んで見えるっていうのは許せないなって思います。どの角度から見てもバランスがいいものでないと。もちろん、木なので多少の動きはあると思いますが。」

—NC 工作機のプログラムにもこだわりなどありますか？

「NC のプログラムも結構奥が深くて、製品作りとはまた違う面白さがあります。図面が上がって来たときに、工程が多い場合や危険が伴うときは NC 工作機で製作する方法がないか探します。参考書を広げて読んだり、近くの木工会社の人とコミュニケーションを取ることもあります。NC ではプログラムが僕らにとっての製品になるので、ただやみくもに作るわけではなく、できるだけ圧縮して短く作ることも大切です。そして、NC のプログラムの場合は工場で働くオペレーター

がお客様になるので、自分が作ったプログラムがスイッチを押すだけで問題なく加工してくれるのが

ベストです。ところが、なかなかうまくいかない事もあります。そういうときは、自分が最後まで責任を持つことが大切でしょう。製品作りもそうですが、

完璧になるまで努力しなければいけません。NC 工作機の場合は、ずっと付きっきりで修正や指導をするようにしています」

—お話を伺っていると、多くの知識がないとできないお仕事ですね。

「そうなりますかね。治具を作るということに関しても、工場のどこにどういう機械があって、どんな作業ができるのか頭に入っていないといけません。治具を作るときはどの機械を使うのがベストなのかを決めるのは自分ですから、各職場を回って機械の配置や種類は、すべて頭に入れるようにしています。」



温和な表情でインタビューに応える宇次原氏

—生産技術課のチームワークはいかがですか？

「今の職場は7人で作業しています。どうしてもどこかに偏って仕事集中してしまうことがあります。そういう時は自分の今の仕事を止めてでも優先すべき仕事をみんなで手伝うことができる職場ですね。その点は非常にまとまりのある職場だと思います。」

—職場内で後輩の指導などもされているのでしょうか？

「私は今の職場のなかで2番目に年長になるので、指導してよとよく言われます（笑）。教えるときは、最初にこれはこうやるんだよって教えますが、あとは自分でやってもらいます。それで分からないところがあればまた聞きに來いよってことです。まず、自分なりにやってみることが大切で、それでできたものを私が見て、ここはこう変えた方がいいよってというアドバイスはします。でも、なるべく本人のやり方というのを大事にするように心がけて教えますね。」

—ご自身が学ばれた事などでこれは伝えていってもらいたいという事はありますか？

「先輩から学んだ事はもちろん大切ですが、仕事ってそれを繰り返してやっていくうちに、自分なりに変えていくものだと思うんですよね。あの人にはこう教えてもらったけれど、俺がやるならこうした方がうまくいくなとか…。だから自分のなかで教えられたことをそのままではなくて、変えていくことも重要なかなと思います。もちろん基本中の基本のところはしっかり伝えていってもらいたいですね。とくに安全でケガをしないやり方などです。そして、物作りをするときに自分はこうありたいということを常に意識して仕事をしてもらえると嬉しいですね。」



飛驒産業㈱生産技術課の職場風景

「この歳になっても必ずどこかに新しい発見があるんですよね。だから、楽しく死ぬまで勉強なのかなって思いますね」

失敗を恐れずに、もっとポジティブに。性格もあるので難しいかもしれませんが、常に前向きに上を目指して欲しい。この歳になっても、必ずどこかに新しい発見があるんです。だから、楽しく死ぬまで勉強なのかなって、ちょっと年寄り臭い言い方かもしれないですけど、そう思います。」  
—本日はいろいろとお聞かせいただき、ありがとうございました。

匠という言葉を聞くと、頑固一徹で怒ると工具が飛んでくるような存在をつい思い浮かべてしまうが、宇次原氏はそのイメージとは真逆で、終始温和な表情が印象的な匠だったが、インタビューで伺った話の節々には、物作りに対する熱い思いや匠としてのプライドが随所に見られた。飛驒の匠はただその技量のみを伝承してきたのではないだろう。宇次原氏の言葉にあるように、物作りに対する姿勢や思いが現代にも受け継がれ、そしてそれが並はずれた技術力を生み出す原動力となっているに違いない。